

## にこにこ鉄道物語

伊藤久昭

発車前には、必ず車両の内外を点検する。先ず運転席へ鞆を置くと、ゆっくり車内を歩く。床や座席のごみや汚れ、ドア・窓・中吊りやドア横広告の破損の有無を点検する。後部からホームへ降り、方向幕の確認と外部の点検をし、そして、また車内を通り運転席へ戻る。一両か二両なので、時間はかからないが、

今日からの、指導員のいない一人だけの運転は、全てが自分の責任になると思うと、緊張して動きのぎこちないことが自分でも分かった。

「お早うございます。毎度ご乗車ありがとうございます。」

研修中の昨日までと同じように、既に乗車している乗客に、声を掛けながら運転席へ戻る。その時、何か声を掛けられたようであったが、洋一はそのまま通り過ぎて来てしまったことが、暫く気になった。運転席へ座って最終の確認をし

ている時も、運転席の背後しかガラスのはまっていないこの車両は、乗客たちの声が、ほとんどそのまま聞こえる。

「若い運転手さん今日から一人前なんだね」

「これからもお世話になることだろうね」

洋一は小さい頃から電車の運転手に憧れていた。電車に乗ると、必ず先頭へ行き、遠くへ伸びる線路を、前方へ突き進んでいく時の、向かってくる景色の流れと、運転手の動作に見入っていた。

歯車を回すような音のハンドル操作や、前方の信号や時計を指差し称呼確認する、自信に満ちた流れるような動きが、すぐ格好よく、憧れの大人に思えた。

しかし、JRの特急や新幹線の運転手を、初めて見た時には驚いた。いつも見ているにこにこ鉄道の運転手とはまる

で様子が違った。彼らは真新しい白い背広を着て、黒いアタッシュケースを下げている。帽子からネクタイ・靴まで、更にはホームの歩き方までが格好良く見え、以後あこがれの対象になった。

ある年齢までは、どうしても新幹線の運転手になりたいと思ひ、また、なれるとも思っていた。しかし、中学校を卒業する頃になると、自分には無理だと分かって来た。全国で限られた人しか入れないのだ。たとえその会社へ入社できたとしても、運転手になれる人はほんの一部なのだ。その選ばれた人に、自分のような田舎者がなれるとは思えない。洋一は地元の高校を卒業して、地元のにこにこ鉄道へ入社した。その年は二名しか採用が無かったので、幸運だったと思った。

にこにこ鉄道は海沿いの浦川市のJR浦川駅に接続し、約二十五キロ内陸の笠見駅まで、間に十駅あり全て単線である。沿線は全体的には田畑が広がり、所々に里山や林がある。各駅近くや所々に、大小の集落があり、最近道路事情が良くなったせいで、田畑の中に、建売のパンフレットにあるような瀟洒な家も

見られた。浦川駅と、中ほどでCTCセ  
ンターとなっていて、駐機場や転車台の  
ある垣井駅と笠見駅では、常時駅員が改  
札をしているが、他の九駅は、一部、券  
売機と改札機で対応し、他は整理券を発  
行している無人駅である。車両は基本  
に、朝夕は二両編成約二十分間隔で、昼  
間は一両約四十分間隔で運行している。

全国的に赤字路線廃線の波が来た時  
には、この路線も非常に危うい状態であ  
った。市・町議会では連日議論が戦わ  
された。有識者が参考人として呼ばれ  
たり、沿線住民の署名活動も行われた。  
結局、施設・土地・車両を沿線自治体の  
保有とし、これを無償で借り受けて、に  
こにこ鉄道が運営するという、公有民営  
方式で継続できたのであった。しかし、  
新社名になつたとはいえ、乗客数の低迷  
は変わらず、沿線市・町の負担の重さも  
あり、時々市・町議会において、バスへ  
の代替の声が上がっていた。

もちろん、入社する時の洋一にも、に  
こにこ鉄道の現況を、ある程度理解でき  
てはいたが、子供の頃から走っている電  
車が、無くなることなどは想像できず、

廃線云々の事は、自分とはほとんど関係  
の無いことのように思っていた。

洋一がにこにこ鉄道に入社して、運  
転手になるまでには、約四年半かかっ  
ている。これでもほぼ最短であったと、  
洋一自身は自負している。最初の二年間  
は駅務だけである。小さい会社とは言え  
十二駅ある。乗降客は少なくても、全て  
の駅舎とその周辺を、安全で清潔に保た  
なければならぬ。ホームや駅舎・駐輪  
場やトイレの清掃と、時には修理が洋一  
の毎日の仕事であった。朝から夕方まで  
電車を乗り変えながら、先輩と二人で各  
駅を回った。日ごとに相手の先輩は変わ  
るが、洋一は必ず入っていた。皆その経  
験をしてきたんだと言う立花の言葉が、  
折れそうになる洋一を押しとどめた。

「片川から平原まで空気を運んだ」

運転を終えて笠見の駅舎へ入つて来  
た立花が、自虐的に笑いながら、休憩  
中の洋一の肩を叩いて言った。その駅  
間には乗客が誰も居なかったのである。  
立花は洋一より五歳上であったが、小中  
学校が同窓だったので、洋一には何かと  
親しくしてくれていた。洋一も兄のよう

に慕って、何かと心強く思っていた。

五日に一度ほど、宿直がある。最終便  
を運転して仮眠をとり、翌朝の始発を運  
転するのである。ワンマン運転ではある  
が、突発的な都合で運転できないといけ  
ないので、始発駅となる三駅では必ず二  
人以上で宿直をした。組み合わせにより  
毎回相手は変わったが、洋一は立花と組  
んだ時は嬉しかった。運転手としての心  
得や技術だけではなく、体験したいいろ  
いろなエピソードを、笑いながら話して  
くれた。

洋一が最終を運転して車内を点検し  
ている時、座席の下に、ちょうど幼稚園  
の女兒が好みそうな、小さなプラスチック  
の水筒を見つけた。今日は三時の便  
で、遠足の幼稚園児20名ほどの団体に  
使った車両なので、恐らくその子たちの  
一人であろう。落とし物は浦川駅で保管  
しているので、保管ケースに入れておい  
た。

一週間ほどして、点検を済ませて車両  
から離れる時、例の水筒を思い出した。  
落とし主に返つたであろうか。もしま

だだったら、小さな子供にとつては、大切なもので困っているに違いない。ケースを見ると、問い合わせもなかったのか、水筒はまだ残っていた。あの時は気が付かなかつたが、名前が書いてある。「さくら　ますみ」。遠足で乗車したあの幼稚園の、さくら組のますみと言う女兒の水筒なのであろう。その幼稚園は垣井駅の傍なので、洋一は帰宅の時に届けることにした。

「みそらようちえん」。いかにも幼稚園らしい、花飾りのついた木の看板をくぐった。七時を過ぎていたので、さすがに建物全体は暗かつたが、玄関脇の職員室には、明かりがついている。外から声を掛けると、若い女性が応対に出た。洋一は事情を話して水筒を差し出した。ところがその女性は、「さくら」と言う組も無いし、ますみちゃんと言う子もないと、水筒の名前を確認しながら言った。その時奥にいた少し年配の女性が、三年前に、佐倉ますみと言う子がいて、キツネのぬいぐるみを付けていたのを覚えていたと言った。園の近くに家のあることを聞いて、洋一は、今から直接届

けることにした。

「金子君よね」

礼を言つて去ろうとした時、先ほどの若い女性呼び止めた。洋一は気付かなかつたが、見ると中学校で同級の戸田夕子であつた。中学時代活発に走り回っていた夕子が、今では、いかにも幼稚園の先生らしく、落ち着いた雰囲気になつていた。園児はとくに帰つたのに、先生たちは遅くまで明日の準備をしているのだ。洋一がそれを言うと、子供たちの喜ぶ顔を想うと、少々遅くなつても仕事を楽しみたいと、夕子は笑つて言った。

佐倉家の玄関に立つと、誰かに何かを指示するような、甲高い女性の声が聞こえて来た。なんだかタイミングが悪いような気がして、一瞬躊躇したがチャイムを押すと、応対に出た女性は、娘の物に間違いないことを言い、丁寧に礼を言つた。

ある日洋一が駅舎の掃除をしていると、突然背後から「運転手さん」と呼ばれた。全く予期をしていなかったので、驚いて振り返ると、一人の年配の女性

が、にこにこしながら立つていた。見ると、毎週のように浦川の病院へ通院していると言う、数人の女性の乗客の内の一人であつた。

「あ、お早うございます。お客様はこの近くにお住まいですか」

「いつも駅をきれいにしてくださつてありがとうございます」

その女性は少しためらうようになつてから続けた。

「まずはお礼を言わなければならぬのですが、水筒を届けていた দিয়েありますがどうございました。あれは私が孫から貰つて使っていた物で、失くしてしまつて困っていました。届けて頂いて助かりました」

女性は頭を下げてから続けた。

「それからお願いがあるのですが、実は、電車で一緒に乗る皆で相談したことで、私たちの乗り降りする駅を、自分たちで掃除をさせてもらえないでしょうか。勿論、年寄りのする事なので、十分にはできないかも知れないけど、いつもお世話になつてるので、少しでもお手伝いがしたいし、身体を動かすこと

は、自分たちの健康のためにもなると思ってお願いをするのですか」

全く予期していなかった話で、洋一は直ぐには理解ができなかった。

「ありがたうございます。しかし、私では何とも言えませんので上の人に伝えます」

女性はその後、毎週リハビリの為に、病院へ通っている事、自分たちは車の運転ができない事、カートを持ち込んでバスに乗りにくい事、にこここ鉄道は今の自分達の生活には欠かせない、非常にありがたいものであることをしきりに言った。この女性たちにとつて、にこここ鉄道は健康的な生活の中で、重要な位置を占めているのだ。その鉄道に少しでも助力したいと言う気持ちは、洋一にも分かる気がした。しかし、まだ新米の自分が言い出すわけにはいかないと思い、まず立花に相談した。

「親切で言ってくれるのだから、受けて良いことだと思うよ。自分も一緒に行くから、今から高橋さんに伝えに行くらう」

「これまでそんな話しは聞いたことが

なかったが、断る理由もないと思う。しかし、すべてを任せてしまうわけにはいかないの、手伝ってもらおうと言う形でどうだろう。自分たちの当番は今まで通り組んで置いて、もしきれいにして貰ってあれば、有難いと言うことにしよう。我が社にも時々廃線の話題が持ち上がるが、それを拒む力は、鉄道会社の社員の方々の力では決してない。地元の人々の必要性と、にこここ鉄道が如何にお客様に慕われているかによるのだ。いろいろな面で、地元との関係が密になるのは良い事だと思う」

普段は冗談が多く気さくな高橋が、この時は洋一に視線を合わせて言い切った。長年にこここ鉄道に尽くしてきた高橋の、仕事に対する姿勢が、はっきり見えたように思った。廃線の波を押しとどめる力は、沿線の住民にあると言う言葉は、洋一には新しい視点であった。

洋一は高橋の言葉を、佐倉さんたちに伝えた。それを聞いた女性たちは、嬉しそうに目を輝かせ、取り囲むようにして、皆が一斉に話しかけてきた。洋一がこの申し出を聞いたのはつい先日この

とであったが、女性たちは随分前から相談していたようで、既に具体的な計画がほとんどできていた。

「年寄りの私たちですから、十分にできないかも知れませんが、いつもお世話になっているので、少しでもお手伝いしたいし、私たちの気持ちの張りにも、リハビリにもなると思うので、喜んでやらせていただきます。電車の仲間でもまだ他にもやりたいと言っている人たちも何人かいるので、それもまとめて、計画とメンバーを報告します」

数日後、該当する駅名と担当者の名前が高橋に届けられた。

「皆さんのお申し出を嬉しく思い感謝しています。ただし危険のないように、無理をされないようにお願いします。私たちも今まで通り当番を組んでいますので、出来なくても気になさらないでください」

代表でやって来た二人の女性に、高橋は丁寧に謝意を述べた。実際にどれほど実行されるかは分からなかったが、半数以上の駅が網羅されていた。翌日高橋は、全員に今回の経緯と今後の対応を

伝達した。

何時ものように、配置された清掃の担当者、各駅へ行った。しかし、約束の駅舎とトイレは、完全にきれいにされていた。余裕の出来た担当者は、これまではあまりできなかった、フエンスの外の草取りや修理をした。このような報告が、次々と高橋に伝えられ、そして全員に共有された。

洋一は地元民に慕われる鉄道と言った、高橋の言葉を反芻していた。笠見駅から毎週通院している女性たちは数名だが、他の駅から二人・三人と乗り合わせた人や、また、たまにしか乗らない人たちまで、にこにこ鉄道に愛着を持ち、応援してくれているのだ。それはそのまま、この鉄道を必要とし、存続を願っている人たちなのだ。通勤通学の乗客が一段落した、九時台からは高齢者が多く、杖やカートの使用が多い。運転手は乗降が困難な乗客には、注意を払っていて、必要な時には補助に走っている。自分たちが当たり前のようにやっていることが、感謝されているのだと思った。

「新しく、車椅子乗車の要望がありました。介助をよろしくお願いします」

高橋からの伝達があった。所定の黒板には、乗客名・日時・乗車区間が、既に書き込まれていた。にこにこ鉄道では、予約があれば車椅子での乗降の介助をしていて、現在も一名の乗客が、隔日ではあるが乗降をしている。

黒板に書かれた二人目の名前は「松田保夫」であった。最初の乗車の日時は、明日の笠見の九時と浦川の三時で、週四日となっている。洋一は名前を暫く凝視していた。それほど珍しい名前ではないので、洋一の忘れることのできない人物と、同姓同名なのであろうとは思っていたが、もしかしたらと言う気持ちも消えなかった。

初日の松田が乗車する時には、ちょうど休憩中の洋一が介助することになった。高橋の説明では、松田は他県から転居して来て、笠見駅の近くに住み、駅までは車椅子で来て、終点の浦川駅まで乗車し、駅前からは支援施設迎えのマイクロバスで、作業所まで通うと言うことであつた。

翌日車椅子でやって来た松田は、こういうことが初めてなのか、不安そうな様子で、改札を通った。小学生の頃の面影が十分残っている、それは紛れもなく、小学校で同級だった松田保夫であつた。保夫は待ち受けていた洋一に促されて、ホームへ出た。何時もの車椅子の乗客と比べると、若さなのか非常に器用で、介助はほとんどいらぬように思われた。ホームでは、停車中の列車とホームとを繋ぐように、洋一は持ってきたステップを渡した。保夫はそこも難なく通り、車内へ入った。洋一も入って駐車スペースでの駐車の手方を説明し、下車駅では駅員が介助に来ることを伝えて、ホームへ戻った。

保夫は同級生の洋一とは、気が付いていなかったようだ。それは無理のないことで、洋一には松田保夫と言う名前が分かつていて、もしかしたらと思つて見ていたが、保夫は初めての駅での初めての介助の乗車で、不安と緊張があつた筈である。洋一が乗車し終えた保夫を残してホームへ出る直前、保夫が初めて顔を上げて礼を言った。一瞬洋一は名

乗ろうかと思つたが、発車の時刻が迫つていたのと、保夫の目は、決して懐かしさの表れた目ではなかつたので、保夫が氣付いていないことを確信して、そのままホームへ出た。

洋一と保夫は家が近所で、然も小学校の同級だつたので、下校後は殆ど毎日一緒に遊んだ仲であつた。洋一たちが六年生の時である。その頃、誕生日には、クラスの親しい友達を家へ招いて、誕生会をするのが流行つていた。ほとんどの家庭は、来てくれた友達に、ケーキや菓子とジュースでもてなし、ゲーム機や漫画を持ち寄つて、一緒に遊ぶのが普通であつた。ところが、同級の宮脇誠の親は誠の誕生会に、友達を呼んで川原へ行つて、バーベキューをする計画を立てた。宮脇の家は三年前都会から引つ越してきたので、何かと都会的であつた。誠の話し方や普段着も皆と違つて、格好よく見えた。バーベキューは聞いたことはあつたが、実際に経験したことになつた洋一たちには、すごく楽しみになつた。

当日は同じクラスの洋一・保夫を含め

て八人と、保夫について宮脇家へも遊びに行つたことがある、保夫の弟の守が招待された。場所は坂井川の河川敷で、町から四キロほど離れていたが、誠の両親がピストン運転をして、子供たちや道具や食材を運んだ。どこの誕生会でも、出てきて世話をするのは母親だけなのに、誠の家では父親まで一生懸命に手伝つていた。洋一はこれが都会的な家族なのだ、目新しく思つた。

誠の両親は子供たちに、キャンプのよきな経験をさせてやりたいと思つていて、テントを張り、かまど造りから火起こし、材料の下準備まで、慣れない子供たちに、面倒がらずに教えながらやらせた。子供たちは、最初のうちは初めてで珍しく、楽しくはしゃぎながら作業をした。しかし、暫くすると飽きてきて、一人二人と抜け出し、ゲーム機で遊んだりテントで漫画を読んだり、河原を走り回つていた。洋一と保夫は川で小魚を掴まえていた。岸近くの浅い所にも、案外エビや小魚がいた。弟の守は一人で喋りながら、水際に、掴まえた魚を生かす池を作つていた。

「その岩の下に大きな鱒がいる。あれを掴まえたら、皆びつくりするぞ。逃がさないように、何か入れる物を借りてきてよ」

川に入つて魚を掴まえていた保夫が洋一に言つた。分かつたと言つて洋一はバーベキューの方へ走つた。洋一が何を借りようかと迷つている時に、準備をしていた宮脇さんが突然大声で言つた。

「ハイ皆、バーベキューの始まりよ。

集合」それを聞いて、散らばつていた皆が歓声を上げて集まつて来て、言われたように皿と箸を持ってバーベキューを取り囲んだ。この時洋一は、保夫に頼まれていたことをすっかり忘れて、皆の中に入つていた。池を作つて遊んでいた守も、みんなの歓声を聞きつけて走つて来た。それからしばらくは、賑やかなひと時であつた。沢山の肉や野菜が焼かれ、ジュースやごはんも用意されていた。

保夫のいないのに気が付いたのは、食事が一段落した頃の宮脇さんの奥さんである。目まぐるしく動いていた子供たちが、満足し始めた時、食器の台に、新しい皿が一枚残つているのに気が付いた。

不思議に思つて人数を数えてみると、一人足りない。この瞬間呆然となつた。思ひ返してみると、みんなが集まつてきて、パーベキューが始まつてから、保夫の姿を見ていない。せいぜい三、四十分ほどであつたろうが、子供たちは競争のように食べた。肉や野菜を必死に焼き、子供たちの差し出す皿に次々と配つた。もちろん一人一人の顔を確認して動いていたわけではないが、保夫の顔を見た記憶はない。

「松田君がいないね。いつから。どうして。誰か知らない」

広く敷かれたシートに、満腹して座つたり寝転んだりしていた子供たちは、今まで笑顔だつた宮脇さんが、急に真剣な顔で、矢継ぎ早に質問したので、何事かと驚いたようであつたが、答えられるものは誰も居なかつた。弟の守には直接宮脇さんが尋ねたが、叱られているように思つたのか、守はもぐもぐ言つて俯いてしまつた。この時から宮脇さん夫妻の言葉つきや動きが変わつた。

「保夫君を探しに行くから、君たちは全員このシートの上に居なさい。動いた

ら駄目よ」

厳しい口調で皆に言うのと、二人で名前を呼びながら走つて行つた。

パーベキューをした辺りは、砂や小石の原が割合広くなつてゐるが、少し川下へいくと、堤防下から水際まで幅広く、びっしりと背の高い葎が生えている。流れの幅はそれほど広くはないが、大小の折り重なつた石を縫うように流れる水は、所によつて深く速い。宮脇さん夫妻は、川上や川下の堤防から葎の原をのぞきながら、保夫の名前を呼んで駆け回つた。そして息を切らせて戻つて来て、どこへ行つたのだろうと何度も言いながら、電話をしていた。

しばらくすると、保夫の母親と三人の警察官、更に暫くすると、十人ほどの消防隊員がやつて来た。やつて来た人たちは、必ず最初に宮脇さんに、保夫のいなくなつた時刻や経緯を訪ねた。そして子供たちにも尋ねたが、子供たちも知らないと言つた。子供たちは皆黙つてシートに座り、大きな声で喋り目まぐるしく動く大人たちを珍しそうに見ていた。始めて見る光景で、すごいことになつた

と驚いていた。消防隊がやつて来て三十分ほどした頃、保夫は二百メートル程下流で見つかつた。石の重なつた隙間に、流木と一緒に、胸まで挟まれて氣を失つていたが、幸い顔が出ていたので、余り水を飲まずに助かつた。

洋一には経緯の全てが分かつていたが、とても言い出すことはできなかった。あの時保夫は、葎を掴みながら、水際を下流へ進み、川に入つて石の下にいる鱒を見つけ、何か入れる物を借りてきつてと洋一に叫んだ。洋一は直ぐに、パーベキューの準備をしている、宮脇さんの所へ行つた。洋一が宮脇さんに、何か掴まえた魚を入れる物を貸してと言おうとした時、宮脇さんが大声で集合と言つたのだつた。そしてみんなが歓声を上げて集まつて来たのだ。あの時保夫は、ズボンをまくり上げ、不安定な石に足を掛け、膝下ぐらいまで水につかつて、洋一が戻つて来るのを待つていた筈である。それを知つてゐるのは洋一と、二人の近くで遊んでいた、弟の守である。洋一は保夫の所へ戻らなかつた。集合を聞いた瞬間から、完全に皆と同じ行動をとつ

てしまっていた。保夫のいないのに気付いた宮脇さんが、おろおろして保夫を探し始めた時、また警察や消防隊が来た時、洋一には何度も保夫のいる所を言い出すチャンスがあった。しかし、事態がどんどん大きく厳しくなっていくのを見て、洋一にはとても言い出す勇氣は無かった。

保夫は最初浦川市の市民病院で治療を受けたが、石に挟まれていたため、下半身に複雑な骨折や、神経や筋肉の断絶があり、普通に歩けるようにはならないだろうと診断された。しかも治療の半ばで、父親の転勤で、他県へ転居した。また、宮脇家も、身勝手な趣味で、子供たちを危険な所へ連れ出したと言う、近所の非難の声もあり、居づらくなったこともあって、誠の中学への進級を機に、転居していった。

保夫の車椅子乗車の予約は、毎週四日であった。洋一は率先して介助役を引き受けた。不思議に思われるといけないので、幼馴染であることを、皆には言っておいた。

「やっちゃんだね」

「やっぱりようちゃんか」

洋一が保夫を介助した三回目の時、下車した保夫を改札から送り出した所で、初めて幼友達としての声を掛けた。保夫も二回目の時から気が付いていたというので、短時間ではあったが、子供の時のような会話になった。

以来、時間のある限り話すようになってたが、洋一にはどうしても言い出せない話題があった。そして、それは保夫も意識的に止めているように洋一には思えた。ある時、前の話しとの脈絡が無く唐突だったので、不自然な感じは否めなかったが、洋一は尋ねずにはおられなかった。

「どうして歩けなくなったの。もしかしたら六年生の時の、あのパーベキューの時の怪我で」

保夫は予期していた質問であるかのように、洋一の言葉が終わらないうちに小さく頷いた。

洋一は保夫とはあの事故の日以来、車椅子乗車の介助をするまで会っていない。保夫は現場から救急車で運ばれ、そ

のまま入院して、暫くして転居していった。勿論その間、大きな怪我であることや、歩けなくなりそうだと言うことは、何となく聞かえてはきたが、それだけであった。そして、それを話題にしたり問はずことは、自分が悪者になると言う、恐ろしいきっかけになると思われたのでできなかった。

洋一には更にもう一つ、その関連で知りたいことがあった。こちらが核心であるとも思った。保夫はあの時あの現場での経緯を、どれだけ知っているのだろうか。あの瞬間、保夫のいた河原と、皆がいたパーベキューの会場との間には、見えない壁のようなものがあつた。保夫は河原側だけしか分からなかったし、他の皆はパーベキュー側しか分からなかった筈である。あの時、洋一ともう一人保夫の弟の守だけが、壁の両側を知っていたのだ。保夫には見えないパーベキュー側で、どのような展開があつたのか、保夫は後にでも詳しく聞いたであろうか。洋一の取つた行動、それは何もなかったと言う、負の行動を知ってしまったであろうか。

ここにこの鉄道の清掃を手伝っている高年齢の人たちは、人数も増え、トイレ掃除だけにとどまらず、待合室や駅舎の周りまで掃除をするようになった。そして、何よりも変わって来たのは、社員とその人たちとの間の雰囲気である。駅やホームで挨拶を交わしたり、時には雑談に進むこともあった。その人たちとの話の内容が社員間の話題になったり、時にはそれが、打ち合わせで紹介されることもあった。掃除を手伝ってもらうことは、社員にとつてありがたい事であつたし、その人たちにとつても、自分たちが役立つと言つて嬉しさがあつた。そして、いつの間にか「ここにこの鉄道友の会」と言うグループ名を使うようになっていった。

「掃除の時間や順番等を互いに連絡するのに、グループ名が無いと不便なので」

佐倉が洋一に言ったことがある。

洋一には次にやりたいことがあつた。それは佐倉たちの希望していたことで、これまでの要望とは少し種類が違つたため、会社へはなかなか言い出し難いこと

であつた。洋一には高橋の言つた、地元の人たちから親しまれる鉄道に、合致していると思えたが、暫くは言い出せなかつた。思い切つて立花に打ち明けると、立花はすぐ理解して、二人で高橋に言いに行つた。そして驚くほど簡単に事が運んだ。

浦川駅と笠見駅の待合室に、掲示板を設置した。カラーのベニア板の半裁を、洋一が切り口をカラーテープで少し加工した貧弱なものであつたが、長らく全く変わらなかつた暗い駅舎の中へ、一陣の風を吹き込んだように、駅舎の雰囲気を変え、客の目を引いた。そして翌日には、列車時刻の変更と、ここにこの鉄道友の会の、活動計画表と会員募集のチラシが貼られた。

その日は工藤の様子がいづつもと少し違つていた。工藤は通院組の佐倉たちのように、定期的に乗車するわけではなかつた。何週間も来ないことがあれば、二・三日続けて乗車することもあつた。しかも終点の浦川まで乗車して、折り返しで戻ることあれば、浦川駅で改札を

出て、暫くして戻ることであつた。佐倉たちに出会うと、古くからの顔見知りらしく結構喋つていたが、それでも座席は離れて座つていた。しかも、走行中に時々座席を離れて、運転席の後ろに立つて前方を眺めている時があつた。洋一が他の乗客と少し違つてゐるのを不思議に思い、立花に話すと、工藤と言つて十年ほど前まで、ここにこの鉄道で運転手や車掌をしていた、自分たちの先輩で、高橋とは親しかつたと教えてくれた。

洋一の運転する列車に、浦川から乗つて来たその日の工藤は、いづつとは違つていた。運転席の後ろに立つてゐる時も、少しふらつてゐるような感じだつたので、洋一は危ないので座つてくたさいと声を掛けた。しかし、一旦は素直に座つても、また気が付くと運転席の後ろに立つてゐた。列車は終点笠見に到着した。見ると何時もは二駅手前の坂上駅で降りる工藤がまだ乗つていた。しかもどうしたわけか、乗客の降りてしまつた車両の中を、前後に急ぎ足で歩き出した。誤つて乗り越してしまつたのだと気付いた洋一は、工藤に近づき、向かいの

3番ホームの列車で戻ってくださいと言った。ベテランの先輩に、このような初歩的な事を案内するのは変な気がしたが、工藤の様子は何となく落ち着きがなかったし、眼の焦点が合っていないような、全体的に不安が感じられた。駅舎に入って連行の報告・記録をした後、念のため3番ホームへ出てみたが、工藤は無事に乗っていったようで誰も居なかった。

翌々日の新聞に工藤の死亡記事が出た。工藤は線路沿いの、林の傍の農機具小屋にもたれ掛かる様にして、遺体となって発見された。頭部に少々の外傷は有ったが、死因は、恐らく低体温症であろうと思われ、理由は調査中となっていた。洋一は記事を読んで驚いた。推定される死亡日時は、一昨日の深夜であり、発見された農機具小屋のある場所は、工藤が下車するはずの坂上駅よりさらに浦川寄りであった。

あの日、工藤は3番ホームから浦川行きの列車に乗り、その後どのような行動をとったのであろう。もしかしたら、本来下車すべき坂上で下車せず、また乗

り越してしまい、次の片川で降りて、今度は徒歩で帰宅することを思いついたり、のかもしれない。洋一は、あの日の工藤の様子を考えれば、その可能性は大きいと思つた。工藤の気持ちになれば、長年自分が運転して、全てを知り尽くしているこの路線で、何度も乗り越したり、次の列車をホームまで案内してもらつたことは、工藤自身の中で、耐えられないほどの、恥ずかしい屈辱的なことであつたらう。もし、洋一が工藤の様子と気持ちを推し量つてうまく取り計らい、3番ホームの列車の運転手にそれとなく事情を伝えておいたなら、この様な事態にはならなかつたかもしれない。

翌日、工藤の葬儀に、高橋に付いて洋一も参列した。高橋は長年同僚であつたが、洋一は入社した時、既に工藤は退職していたので、全くつながりは無かつた。ただ乗客としての工藤に最後に接したのは洋一と考えられたし、混乱していた工藤を、結果的には突き放したようにしてしまつた、その無念さのようなもので、どうしても参列したいと思つた。

工藤の葬儀は寂しいものであつた。親

族は甥一人が付き添い、通夜も告別式もなく、僧侶の読経もない直葬で、火葬場へ集まつた自分たちと近所の四・五人が、順番にお別れをしてあつけなく葬儀は終わった。

帰途、工藤について高橋が語つた。工藤はとにかく真面目で、確実な仕事をし、皆から特に信頼されていた。ただずいぶん以前だが、一度だけ事故を起こした。赤信号を見落とし、先行の列車と接近してしまつたのだ。絶えず青信号だけを見て進行するという、基本中の基本を誤つたのだ。普段のダイヤでは、その時間帯のその信号は青になつていたが、その日は臨時便が入つたためのダイヤの変更を、工藤はうっかりしていたようであつた。接近したとは言つても、先行の列車とは二百メートル近く離れていたので、決して衝突の危険があつたわけではないが、入つてはいけないうエリアに列車を入れると言う、運転手にとつて、決して許されない事故であつた。直後の工藤は、周囲の者が心配するくらい、ショックを受けていた。事故と言つても、乗客も気が付かないようなミスなの

だと、周囲が頻りに慰め、五日ほど休暇をとって、やっと復歸したのであった。

洋一は車内での乗客としての工藤の行動が、理解できたように思われた。認知症の所為が大きいのであろうが、車内での工藤は、時々ここにこに鉄道社員に戻っていたのだろう。長く勤めていた、運転手や車掌に戻っていたのだ。たびたび運転席の後ろに立つて、前方を眺めていたが、あの時、生涯で最大のミスであった、赤信号見落としの場面が、意識の全てを埋めていたのかもしれない。

友の会と言う名称を使うようになってからの会員の活動は、更に活発になっていった。もちろん、それには社員側の意識の変化も影響していた。会員たちは思いついたことを社員に提言し、それを聞いた社員は高橋に提言した。その流れが幾筋もできたのだ。ほとんどの駅舎の壁や柱には小さな花器が掛けられ、自宅から持ち寄ったり、呼びかけて集まった花が挿され、絶えず手入れがなされていた。また、線路沿いの空き地が細い花壇に変えられたり、バラの垣根に変えら

れていた。

ここにこは鉄道を取り巻く変化は、駅舎付近だけにとどまらなかった。友の会の活動が地元の新報に取り上げられてからは、特に笠見町の青年団が、町興しの取り組みを始めたのだ。自分たちの町にも、自慢できる良さがあることに気付いたのだ。季節により、相談して蓮華や菜の花畑を作ったり、休耕田をコスモス畑にして、それで迷路を作った。これには子供たちが喜び、翌年からは、浦川市の二つの幼稚園や小学校も初めて遠足に来るようになった。

ある社員から、今までになかったサービスの提案があった。それは電車のドア横のスペースに、普段、町の公民館で活動している、句会や歌会の作品を、展示して貰おうと言うのであった。

「毎月公民館へ集まって勉強しているも、発表できるのは年一回の文化祭一日だけだったのが、自分の作品が車内に展示され、多くの人たちに見て貰えたら、すごく嬉しいのじゃないだろうか」

その社員は熱く語った。車内掲示なので、他の宣伝ポスターと、余り差異が無

いようにと様式をそろえ、「沿線の文化」と、高橋が表題をきめて、以後定期的に、駅舎にも展示することになった。

洋一は、あの時以来、みそら幼稚園の戸田夕子と、時々会ったりメールを交わしていた。夕子は、子供たちが非常に電車が好きだと言うことを、頻りに言っていた。それは洋一も感じていた。みそら幼稚園は、細い農道を挟んで線路沿いにあつたので、電車が通ると園庭の子供たちは、遊びを止めて手を振った。

「子供たちは皆恐竜が好きだけど、それは大きな体で力強くダイナミックに動くところに惹かれるの。子供たちにとつて、電車の大きな体と頑丈な鉄でできた機械の力強さが、恐竜と同じように感じるよう。しかも自分がそれに乗って猛スピードで走るのだから、たまらないようよ。たとえ遠足の三十分程の乗車でも、その日は朝から子供たちの声が大きく目が輝いているの。自家用車や送迎バスとは全く違った魅力があるようなの」

最近、ここにこは鉄道では、幼稚園の遠足での乗車には、なるべく貸し切りの一両を連結して車掌をつけた。また、始

まった浦川市の幼稚園児が、浦川から笠見まで遠足で乗車する場合には、途中垣井駅だけに停車する、臨時の急行を運行することもあった。子供たちは好きな電車の中で話したり歌ったりして楽しみ、教師は他の客の迷惑を心配することが無いので、にこにこ鉄道はこの企画は、うまく当たったと言えた。

松田保夫の行動は、年中全く変わらなかった。週四日、決まった時刻に笠見の改札へ来て、予約した列車に乗り、浦川で降りて仕事に行った。そして、帰日も全く同じであった。乗降時の介助は、時間のある限り洋一が引き受けていたので、保夫と話す機会も時々あった。

保夫がにこにこ鉄道に乗るようになったのは、浦川市の障害者就労支援施設で働けるようになり、笠見の祖父の家へ同居できた時からであった。祖父は昔から駅近くで小さな自転車店を営んでいた。家と駅との間は車椅子で、そして、にこにこ鉄道を利用し、浦川駅との間は施設の送迎マイクバスを利用すれば、自分の働きで生活できることが計

算できた。ぎりぎりのスケジュールなので、どこか一か所狂えば、自分では手に負えない事態になる危うさはあったが、自分の能力では仕方が無い事でもあった。いろいろな場面で大くさんの人に補助してもらうことにはなるが、それでも何とか自分の生活費を、自分で稼げるのだが、保夫の喜びであった。

ある日帰って来た保夫を改札まで付き添った洋一は、喫茶店にでも行こうかと誘った。しかし、保夫は苦笑いをしながら断った。

「自分にはいつもと違う飲食はできないのだ。体調を崩す恐れがあるし、必ず決まった時間に決まったトイレへ行かなければならない。急いで動けないし、自分の行動範囲内で、車椅子が使えるトイレは限られている」

洋一は同級生の保夫が、自分よりよほど年長者に感じられた。保夫の介助を度々している内に、保夫の全てを知っているつもりになっていたが、最も基本的な事すら知らなかったのだ。保夫が必死になって車椅子で駅までやってくる姿や、介助して貰いながらも、一生懸命

列車に乗り込む姿は、健常者が慌てて乗り込む姿とは、全く異なっていたのだ。「守君と言う弟がいたね。今どうしているの」

洋一は思い切って聞いてみた。毎日のように放課後二人で遊んでいる時には必ず守もついて来て、傍で一人で遊んでいた。

「実は守は少し心配なんだ。高校は卒業したけれど、就職先を転々と変わっていて、落ち着かないのだ。時々俺の前へ現れるけど、その度に仕事が変わっている。絶対仕事を変われない俺への、当てつけのように思う時すらある。俺は誰かの世話にならないとやっていけない身なので、注意もできないし」

にこにこ鉄道は、乗客数はそれほど増加したわけではないが、沿線の人々のこの鉄道に対する印象は大きく変った。浦川・笠見間二十五キロの線路沿いに、ぼつりぼつりと建っていた小さくて薄暗い殺風景な駅舎、朝夕には学生とサラリーマンが急ぎ足で通り過ぎるだけの駅舎、その駅舎それぞれに、今では

小さな花瓶に花が挿され、沿線の文化と名付けられて、何枚かの写真やスケッチ、俳句や短歌の作品が展示されている。当然、通り過ぎていただけの駅舎内に、人々が滞るようになり、会話や笑声が聞こえるようになった。

笠見町も変化した。以前は一年に二度神社の境内へ、みそら幼稚園の園児が遠足で、松かさやドングリ拾いに来ていただけだった。しかし、それを見ていた町の若者たちが、子供たちをもっと喜ばせてあげたいと思い、にこにこ鉄道の変化にも触発され、町興しにまで動き出したのだ。

また、高校の生物部の研究発表もこの流れに拍車をかけた。笠見と平原の間で少し入った山間に、割合大きな笠木池がある。その笠木池やその周辺の山野に居ついたり、季節によってやって来る鳥を観察して発表した。地域的に広葉樹が多いので、鳥の種類と数の多さは、専門家も驚くほどであった。それが新聞の記事になり、青年たちはバードウォッチングを目的とする、歩行者と自転車の周遊路を決め、その案内板を立てて整備

をした。以前から、にこにこ鉄道が時間と区間を設定した、サイクルパスをやっていたので、下地は出来ていたが、利用はごく少数のマニアだけに限られていた。それを、少し関心を持つ一般の人たちも参加しやすい計画にしたのだ。

青年たちは、駅近くで自転車店を営んでいる、松田自転車店に、レンタルサイクルの相談をした。その話を受ける決断をしたのは、祖父から話を聞いた守であった。守は青年たちに引き受けるにあつての、一つの提案をした。

「レンタル自転車は、安価で小回りが利き、自分のスケジュールに合わせて楽しめる、非常に便利なものです。しかし、ほとんどの場合、返却時には同じ道路を通って借りた店へ戻り、そこから自力で帰らなければならぬ。それでは時間のロスがあり、楽しかった余韻も半減してしまう。私の提案は、客の出発は笠見駅前からとし、返却はにこにこ鉄道の駅の駐輪場としたらどうか。もちろん客はそこから電車を使って帰宅する。夕方私は各駅に置かれた自転車を回収し、店を点検して明日の客に備える」

青年たちは喜んだ。これ以上の好条件は無いと思った。もともとサイクリングコースをどれだけ工夫してみても、この地域では、驚くようなきれいな景色が見られるわけではなく、風を切って走れるような素晴らしい道路もない。水鳥の浮かぶ池を周り、里山・小川・林・田畑の繰り返し農道を、探鳥しながらゆったりとした時間を楽しむのだが、この企画なのだ。しかし、もし乗り捨てができたなら、それは大きな魅力となる。借りた所まで戻る時間を考慮しなくて良いのだ。自分の気持ちに合わせて、行きたいところまで行き、最後はにこにこ鉄道のどこかの駅に辿り着ければよいのだ。

松田自転車店は、まず十台の自転車を用意した。しかしすぐに予約でいっぱいになり二十台に増やした。中古の家庭用自転車を祖父が整備し、目印に守が青いスプレーを吹き付けて貸し出した。

洋一が運転していると、池の周囲を双眼鏡を掛けて散策している人たちや、青い自転車の農道を走っているのが見えた。時には数台並んでいることもあつ

た。

青年たちと守が駅の駐輪場を、貸自転車で使用させてほしいと要望してきた時、洋一は小学生以来の守を見たが、面影は残っていた。そして、保夫から聞いていたより、余程落ち着いているように見えた。駐輪場の件は、返却した人がそのまま乗客になるのだから、全く問題なく、高橋は了承することを即答した。

友の会のメンバーは、入れ替わりながらも一定数を保っていて、グループの雰囲気も変わらなかった。保夫の行動は全く変わらなかった。祖父や守の生活には大きな変化があつた筈なのに、洋一は保夫の芯の強さを感じた。

ある時保夫に、あのバーベキューの時の経緯を全て話した。凡その事は聞いていたとは思われたが、洋一としては、直接自分で言つて、とにかく一言謝らなければならぬと思つていた。保夫がどんな反応をするかは、全く予想できないが、洋一の取るべき態度は決まつていた。

洋一の詳しく話す経緯を、保夫は最後まで黙つて聞いていた。その態度から

は既に知っていたのかそれとも知らなかったのかは、洋一には判別がつかなかった。

「確かあの時、宮脇さんに、危ないから川へ入らないように、と言われていたね。今日もありがとう」

それだけ言うと、保夫は丸めた背中を見せて、松田自転車店の方へ向かった。

仕事に慣れて自信がついた頃、思わぬ失敗をしやすいと、洋一は立花からよく聞いていた。各種の点検や確認に、実際にはマニュアル通り指差称呼してはいるのだけど、後からふと無意識にやっていたことに気付く。

にこにこ鉄道の乗客は少しずつ増え、沿線の町々にも少し活気が出て来た。この鉄道を頼りにしている人たちの為に、安全で正確な運行を続けなければならぬのだ。了